

二〇二四年度

第四回 入学試験問題

国語（五十分）（全十二ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていない、印刷がはっきりしないなどの不備があったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点など記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。

一 線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) ケンセツ現場に立ち寄る。
- (2) ヒミツ基地を作つて遊ぶ。
- (3) 両手を合わせてオガむ。
- (4) 新しいコウシヤができる予定だ。
- (5) 地面にスイチョコクになるように置く。

二 次の~~~~部が直接かかる言葉を、——線ア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- (1) 彼は 頑張つて ア練習すれば イきつと ウ試合に エ勝つでしよう。
- (2) 私の ア将来の イ夢は ウ看護師に エなることだ。
- (3) 小さな ア葉っぱが はらはらと イ散る ウ風景が エ印象的だった。
- (4) おそらく 明日の ア朝、 イ猫が 庭の 池の ウまわりに エ集まるだろう。
- (5) 私たちが ア知っている その イ生熊は ウほんの エ一部だ。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

境内の中に入り、隅の方にあるベンチに座った。境内の中は高い樹々で覆われているので、太陽の光が遠い。緑のカーテンに包まれたオアシスのようだ。葉陰から光がこぼれる。涼しい風が、ジョギングで熱くなった身体をすっと冷やしてくれる。蟬の音が、波のうねりのように遠く近く聞こえてくる。

やはりここは気持ちいい。クーラーの中にいるより、ずっといい。

ベンチに両手をついて、ぼーっと座っていると、蟬の声の合間を縫うように Spanien、と聞きなれた音がした。まだ七時前なのに、弓道場で練習している人がいるらしい。

こんな早くから誰が練習しているんだろう。ちょっと見てみようかな。

立ち上がって、奥へと歩いて行った。

射場にいたのは、初めて見る男性だった。年齢は七〇過ぎくらい。弓道会にはそれくらい年代の男性が多い。淡々とした表情を浮かべているのに、身体に気迫が満ちている。その姿に、楓の目はあくぎ付けになった。

作法通りにゆったりと弓を掲げると、老人はまっすぐ両脇に引き分ける。カんだ様子はなく、身体と左右の腕が十文字を作り、なめらかに引き分けられていく。そして、しばらくその姿勢が続いた後、矢がごく自然に手元から離れたように見えた。次の瞬間、スパンツと気持ちのいい的中音があった。矢は的のど真ん中を射貫いていた。

その一続きの動作があまりにも美しく、静謐で、楓は思わず拍手していた。それで、老人が楓の存在に気がついたようだった。

「あ、すみません。拍手なんてしちやいけないのに。でも、とてもよかったです。すごくきれいで、自然で」

いま感じたことを、うまく言葉で伝えられないのが楓にはりもどかしい。

「あなたは？」

老人の声は穏やかで優しくかった。柔和な目をしている。

「あの、矢口楓といいます。私もここで弓道習ってるんです。五月に始めたばかりですけど」

「私は国枝といいます」

初めて聞く名前だった。道場で見かけたこともなかった。だけど、人見知りの楓でも、不思議と国枝のことは信頼できる気がした。それで、思い切つて質問を試してみた。

「あの、どれくらい練習したら、そんなに上手に引けるようになるんですか？ いま何段なんですか？」

「段？」

国枝はにっこりと笑った。

「弓歴は半世紀以上だけど、初段だよ」

「①初段？ 嘘！」

初段の先輩は何人もいるが、楓が見てもあまり上手ではない。形がきれいでないし、第一中りが少ない。一〇射して一射も中らない人も多い。や

はり式段、参段と段位があがるにつれてうまくなるし、中りも多くなる。

「嘘じゃない。段級審査というのがどうも苦手だね。一度しか受けてないんだ。初段を持ってないと練習できない場所もあるので、それだけは取ったけど」

「ほんとに？」

楓は「一」を丸くした。弓道をやる人はみんな上の段を目指すものだと思つていたので。それが目的ではないならば、何を指して弓道をやるのだろうか。

「②試合には……たくさん出ているんですか？」

「大学時代には弓道部でしたからね、よく出場してました。でもまあ、それもずいぶん昔のことです。大学出てからは試合も面倒になって、出るのをやめてしまいました。私はものぐさなんですよ」

そんな人もいるんだ。試合も出ない、段級も目指さないというこの人は、何を励みに弓道をやっているんだろう？

「だから、あなたともそんなに差はないですよ。よければいっしょに練習しませんか？」

国枝に言われて、思わず首を左右に振る。

「いえ、私、段を持っていないので、指導者のいない日はやっちゃいけないって言われているんです。だから、月水金しかここに来られないんです」

「おや、そうだったっけ」

国枝は弓道会の規則について、あまり知らないらしい。

「でも、私がいれば 大丈夫ですよ。私の方で指導者に言うておくから。新人指導の責任者は前田くんだったっけ」

「はい、そうだと思います」

責任者かどうかは知らないが、指導者の中では前田がいちばんえらいように見える。その前田をくん付けで呼ぶなんて、この人はもっとエライ人なんだろうか。

初段なのにな？

「じゃあ、大丈夫です。あがっていらっしやい」

国枝に促うながされて、楓は道場に入って行った。

「いつもどの弓を使っているの？」

「まだ初めて間もないので、弓もカケも道場のを借りています」

「そう。じゃあ、いつも使っているものでやってみて」

楓はいつもの七キロの弓とカケを取り出し、共用の矢を置いてある場所から、適当に数本抜ぬいて持ってきた。

「ああ、まだ矢も買ってないんですね。いま持ってきたのは、ちょっと短すぎます」

「そうなんですか？」

「矢の長さは身体の真ん中から左腕うでを真横に伸ばのした中指までの長さに加えて、五〜六センチほどゆとりをもたせたくらいがいい。あなたは腕が長いから、この矢だとほとんどゆとりがない」

楓は矢を右手に持って、自分の左腕にあててみる。言われた通り、三センチ

ちほど矢が長いだけだった。

「あ、ほんとですね」

「慣れた人なら、これでも大丈夫だけど、初心者はもう少し長い矢がいいと思います。できれば、矢とカケは初心者でも自分の専用のもので持った方がいいんですよ。道場のものは扱あつかいが雑だから、矢の筈\*4はずが壊れたりしてこわますし」

確かに矢は欲しい、と楓は思う。カケや弓は借り物だけど、毎回同じものが使える。だけど矢は違ちがう。道場に来るたびに、ましな矢はどれか毎回探さなければならぬのだ。長さが違ちがうし、弓にうまく筈はずがはまらないものもある。自分専用の矢があれば、③そんな面倒から解放される。

「弓はどれを使っているの？」

「これです」

「ちよつと素引きして\*5すごらん？」

国枝に言われると、不思議と素直に従う気持ちになる。楓は矢を置いてカケを着けると、弓だけ持って国枝の前に立つ。そうして、その姿勢で射法\*6八節をやってみせる。□、矢を持っていないので、形だけの射だ。

「そう、いいね。ちゃんとまっすぐに引けている。だけど、この弓じゃない方がいいかな」

「えっ、そうなんですか？」

「あなたは腕が長いし、身長もあるから、伸びの弓を使った方がいいと思う」

「伸び？」

「二寸伸びと聞いて、ふつうの弓より六センチほど長い弓があるんだ。これなんかどうかな？ 九キロだけど」

国枝が別の弓を出してきた。それを受け取ると、楓は弓の弦げんを張り、素引きを試みる。

「これでも大丈夫かも」

いままで使っていた七キロより強いはずだが、なんとなく引きやすい。

巻藁\*7の前で実際に引いてみる。□**日**引きやすい。三、四回巻藁の前で引いた後、国枝が言った。

「じゃあ、ちゃんとの前で引いてくらん」

「はい」

射場の真ん中に立ち、射法八節を頭の中に思い浮かべながら、楓は引いて

みた。矢はまっすぐ飛んで、的のある安土\*8のところまでまっすぐに飛んだ。

地面\*9で掃はけなかつただけでも、楓にとっては嬉しい。

「この弓、私に合うみたいですよ」

「それはよかった。今度は右手の角度をなるべく一定に保ち、肘ひじで引くつもりで引いてくらん」

「はい」

構えた楓の右肘を、国枝が少し上に引き上げた。そのまま矢を放つと、今度もまっすぐ飛び、的の端はしに中った。

「わ、中った！」

楓は思わず声をあげたが、すぐにしまった、と思った。弓道会では動作の

最中に声を出したり、よけいな動きをしたりすることは禁じられている。だが、④国枝は怒らず、にこにこしている。

慌あやまてて楓は足を閉じ、弓を下げると、国枝に謝あやまった。

「すみません。初めての的に中ったので、嬉しくて、つい」

「謝らなくもいいんですよ。初めての的の中、それを嬉しいと思う気持ちは大事です。そういう気持ちがあると、もっとうまくなりたいて、って思うからね」

「はい。私、もっとうまくなりたいですよ。でも」

「でも？」

「私、まだ段を持っていないから、好きな時に来て練習するわけにはいかないんです。初心者とちゅうは月、水、金きんで決まっています。学校があるからいつも途中とちゅうからしか参加できないんです。」

□**日**、土日にも練習できるといいんですけれど」

「そうか。学生の人たちはそうなるんだね。それは考えないといけないなあ」

「はい。できれば土日のどちらかでも練習したいんですよ」

「前田くんたちにも相談してみましよう。若い人たちのやる気に我々も応え

ないとね」

「はい」

「ありがとうございます」

「じゃあ、次は審査と同じ動きで引いてみましょうか？」

審査と同じ動き、つまり一\*10手座射\*11については、楓は練習し始めたところ

で、まだそんなにうまくない。

「いいんですか？」

「ふたりだから、ちょっとやりにくいけど。私が後ろで見ているから、大前\*12をやってらん」

そう言われて、どきどきしながら楓は射場の隅に立った。神棚かみだなに頭を下げる。そして、足を踏み出す。ちょっとお辞儀じぎが早かったかなと思ったが、国枝が何も言わないので、そのまま歩き出す。国枝もぴたりと後についてくる。そして、前に向き直り、足を引いて座る。跪坐きざという、爪先つまさき立った独特の座り方だ。そして、頭を下げてお辞儀すると、横目に国枝がお辞儀しているのが見えた。

タイミング、揃そろっている。いや、国枝さんが私に合わせてくれているんだ。

⑤それに気づいた時、楓はなんだか大きなものに支えられているような心地がした。

自分がどうやっても大丈夫。国枝さんがちゃんと見守ってくれる。

そうして、その気持ちのまま射法八節をした。ひとつひとつ 丁寧ていねいに、それだけに集中した。

すると、なんだかこころの奥がしんと静まった気がした。

先ほどまでうるさいほど鳴っていた蟬の音が、まったく気にならない。

弓と自分。

在るのはそれだけだ。

開いた足の裏から、エネルギーが伝わってくる。それは体の中を駆け上がり、おなかに集まる。そこから背中を通して、頭の上へと抜けていく。

天と地とエネルギーが繋がった、という気がした。

そうして、弓手ゆんでと馬手めてを同じ高さに保ちながら、ゆっくりと左右へと引き分ける。

的と弓手と馬手、一直線になった、と思った時、矢が放たれた。中つた、とその瞬間、わかった。

矢はまっすぐ飛び、スパッと音を立てて的へと突き刺さった。

会心の一射だ。なんて気持ちがいいんだろう。こういう気持ちよきは、初めて経験した。

楓が引き終わると、国枝が続く。楓が前に立っていて、座射の最中は横や後ろを見てはいけないので、国枝の姿は見られない。だが、心地よい的中音がしたので、きつと真ん中近くに中つたんだろうと思う。

(碧野圭『凜として弓を引く』より)

\*1 オアシス……心の安らぐところ。

\*2 静謐……静かで落ち着いていること。

\*3 カケ……弓の弦を引くときに使用する鹿革製の手袋のこと。

\*4 筈……矢の、弦にかませる部分のこと。

\*5 素引き……矢を使わずに弓を引くこと。

\*6 射法八節……一本の矢を射るとき、定められた八つの手順。

\*7 巻藁……射型を確認するための練習用の的。

\*8 安土……弓を射るときに、的をかける場所。土や砂を盛って築く。

\*9 地面で掃ける……矢が的に届く前に地面に落ちて、進むこと。

\* 10 一手……一度の射で甲矢と乙矢の二本の矢を射ること。

\* 11 座射……膝を地につけた姿勢で矢を弦にかけて、立ち上がってから射る射型。

\* 12 大前……数人で弓を射るとき、最初に射る射手。

問一 ――線a「くぎ付けになった」・b「もどかしい」・c「ものぐさ」の意味として適当なものを、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

a「くぎ付けになった」

ア 離せなくなった イ 気にしなくなった

ウ わからなくなった エ 見えなくなった

b「もどかしい」

ア くやししい イ 腹立たしい

ウ 恥ずかしい エ じれったい

c「ものぐさ」

ア 何に対しても、すぐに飽きてしまう性質

イ 何に対しても、理屈っぽい性質

ウ 何をすることも、面倒くさがる性質

エ 何をすることも、言い訳をする性質

問二 ――線①「初段? 嘘!」とありますが、このような返事をしたのは、

なぜですか。その理由を説明した次の文の空欄に入る言葉を本文中の言葉を使って、指定の字数で答えなさい。

楓が知っている初段の先輩は【1 十五字程度】のに、国枝の一続きの動作は【2 二十字程度】から。

問三 ーに入る言葉として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 手 イ 頭 ウ 耳 エ 目

問四 ――線②「試合には……たくさん出ているんですか?」とありますが、このような質問をしたのはなぜですか。本文中の言葉を使って、三十文字程度で答えなさい。

問五 ――線③「そんな面倒」とありますが、どのようなことを面倒と思ったのですか。解答欄に合うように、本文中から三十文字以内で抜き出し、はじめと終わりの五字を答えなさい。

【三十文字以内】ということ。

問六 ーに入る言葉として適当なものを、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア もちろん イ せめて ウ あえて エ ずっと オ やっぱり

問七——線④「国枝は怒らず、にににしている」とありますが、なぜです

か。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 初めての的につながつたのは、自分のアドバイスがよかったからだ  
と満足したから。

イ 初めての的の中に声をあげたことに、子どもっぽさを感じて心底あきれ  
たから。

ウ 初めての的の中を嬉しく思うことは、向上心につながるので大切にした  
いと思ったから。

エ 初めての的の中はまぐれのことが多いが、やる気をそいではいけないと考  
えたから。

問八——線⑤「それに気づいた時、楓はなんだか大きなものに支えられて  
いるような心地がした」とありますが、このときの楓の様子として適当  
なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 国枝さんがタイミングを合わせてくれていることに気づいて、自分が  
下手<sup>へた</sup>でも見守ってくれると安心してゐる。

イ 国枝さんとタイミングが合っていることに気づいて、自分のやり方が間  
違っていないことを確信している。

ウ 国枝さんの姿を確認できることに気づいて、目で追いながら真似<sup>まね</sup>でき  
ることに感謝している。

エ 国枝さんに信頼されていることに気づいて、自分が初心者であること  
を忘れかけている。

問九 次の会話は本文について、二人の中学生が話している場面です。空欄  
に入る言葉を本文中から探し、それぞれ指定の字数で抜き出しなさい。

A：私は音に関する表現に注目してみたよ。初めに蟬の声。【1 十九

字】【2 蟬の声という表現では、四方八方から蟬の声が聞こえる様子が想  
像できる。最後の場面では「蟬の声が【2 十字】【3」と表現すること

で、楓がとても集中していることがわかる。世界に存在するのは【3 四  
字】【4 だけと感ずるくらいに。「蟬の声」をうまく使っているなあって思う。

B：そうだね。蟬の声はこの場面全体の霧<sup>ふんいき</sup>囲気を作り上げているように  
思う。音と言え、矢が的に中つたときの音も印象的。

A：特に、スパッツという【4 九字】【5 は、読んでいる私も、爽快<sup>そうかい</sup>な気持  
ちになる。【6 中でも、音がうまく使われていると思う。音がまず表現され  
て、その後、的に射貫く矢に視線がいく感じで、スピード感みたいなも  
のが伝わってくる。

B：私は、夏の境内の様子の表現もいいなあって思うよ。境内の中にある、た  
くさんの高い樹々が、まるで【5 六字】【6 のようになって、暑い夏の日差  
しを遮っている。風が吹くたびに、その【6 九字】【7 て、きらきらと輝い  
ている、そんな様子がうかがえる。



A:うん、まさに夏の朝って感じだよね。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

食べものの物語り

私の妻が食事をしながら「わが家でとれた食べものは、みんな物語があるよね」と言います。私も「そうだな」と応じます。みんな田畑で、私たちと一緒に、生きものだった時を過ごして、こうして、最後は私たちの身体の中に入っていくのですから。

しかし百姓でなくても、食べものを前にすると「これはどこで穫れたものかな」と思うことが多いでしょう。それは別に「産地表示」を求めているわけではありません。その食べものは生きものだったときに、どういう自然の中で、どういう自然のめぐみを受けて育ったのか、そして自身も自然のめぐみとして、この食卓に上がったいきさつを物語として伝えようとしている、とあなたが感じているからです。そう感じるからこそ、「きみはどこから来たの。どのように育ってきたの」とあなたは尋ねるのです。

食べものを食べることは、生きものを殺して、その命をもらうことです。その生きものと話をする最後のひとときが食卓なのです。ぜひ、そういう会話をしたいと思います。

残念ながら、工業製品には①こういう気持ちで湧きません。「この時計はどこで、だれがどういう気持ちで製造したのだろうか」と想像することAなくなりました。まだ時計が職人の手でつくられていたときには、そういう感

覚もあったでしょう。しかし大量に同じ製品が工場生産されるようになる、関心は性能と価格とデザインとブランドだけになりました。

一、食べものも同じような道をたどっているのです。品質と価格と安全性だけが表示され、評価されつつあります。「中身がよければ、どこでとれたものBいいんです」と言われつつあります。生きものの生を「中身」とか、「品質・価格・安全性」などの性質で表現できるでしょうか。妻が言う「物語」とは、②生きものが語る「物語」なのです。

これこそ、食べものアニミズムの豊かな世界です。

### 心の理論

アニミズムが現代人にとっても、かけがえのない豊かな文化だと見直されてきた理由のひとつは「心の理論」が一九七〇年代に生まれたからです。あなたはなぜ、友だちの気持ちかわかるのですか。友だちの表情や言葉や行動や仕草から、読み取っているからでしょう。どうやら他の動物には③こうした能力はないことがわかってきました。みなさんの相手の心を読む能力は人間だけのものです。このように人類は進化してきた、とされています。

二、みなさんは、この相手の心を読み取る能力を動物や植物や、そして物にも使ってしまうのです。あなたが生きものを好きなのは、生きものの中に通い合うものを感じるからなのです。これこそ、アニミズムの正体なのではないでしょうか。約五万年前から、人類には死んだ人の墓に花を添える習慣が始まりました。「あの人が好きだった花を供えよう」という気持ちは

現代でも続いています。こうしたアニミズムが生まれたからこそ、虫や草だけでなく、雲や雨や太陽や山や川にも心や意図を読み取るのです。」どうして、こんなに雨が降らないんだ。そろそろ降ってくれ」と本気で空を見上げて祈るのです。まるで空に意志があるかのように、相手にしているのです。私たちが「物語」を生み出すのも、そして宗教までつくりあげて信仰するのも、こういう能力を備えてしまったからなのです。

(中略)

農業技術に生きものを「殺す」という意識は含まれているのか

工業技術なら問われることもない生きものの生死への配慮が、農業技術には必要です。ところがこれまでの農業技術ではほとんどとりあげられることはありませんでした。☐近年の「地球温暖化」対策として、早めに田んぼの水を落として乾かすことによってメタンガス(温暖化ガス)の発生を抑えられます。この技術は環境に優しい技術として奨励されています。

しかしこの技術をわが家の田んぼに採用したら、田んぼの中で生きているお玉杓子二〇万匹(10アール当たり)は全滅します。現代の農業技術は、狭い意味での生産を上げることが目標とされ、環境に配慮した技術であっても、このように生きものへの配慮はほとんどありません。④こうした徹底した鈍感さが、近代化技術の特徴なのです。何が欠けているのでしょうか。

近年の口蹄疫対策で「殺処分」された牛は二九万頭を超えました。鳥インフルエンザで「殺処分」された鶏は、何と二〇〇〇万羽に及ぶのです。

最近では豚コレラで一〇万頭の豚が「殺処分」されました。この事態は、伝統的な農業の「殺す」ことは次元が違います。同列には論じられません。ワクチンを投与すれば感染は防げますが、病気の「清浄国」ではなくなり輸出ができなくなるといふ理由で使われていません。生きものの命は国家の貿易の経済価値の前では、抵抗の声さえあげることができないのです。

仏教を超える「また会える」

世界的なベストセラー、ハリリ著『サピエンス全史』(河出書房新社)の1節を紹介します。ホモ・サピエンスは約四万五〇〇〇年前にオーストラリア大陸に移住しました。「その後数千年のうちに、体重が50kg以上あるオーストラリアの動物種二四種のうち、二三種が絶滅したのだ」「この狩猟採集の広がりに伴う絶滅の第一波に続いて、農耕民の広がりに伴う第二波が起こった。(中略)つまり私たちホモ・サピエンスは「生物史上最も危険な種である」。

(中略)私たちの先祖には生きものを絶滅させているという自覚はなかったでしょうが、殺しているという自覚は現代人以上にありました。だから「⑤農業では、生のくり返しこそが、もつとも大切にされました。それは田畑や村の天地自然、めぐみ(食材)だけが重視されたわけではありません。天地自然全体が、毎年毎年同じようにやって来て、その中で生きていくこと自体が嬉しいことだったのです。

たとえば草とりは、草を殺すことですが、草を殺しているという自覚はあ

りません。たぶん日本の百姓が草を殺すという視点を持つようになったのは、仏教のむやみに生きものを殺してはいけないという「不殺生戒」の影響ではないでしょうか。たしかに私たち百姓はおびたらしい生きものを殺してきました。しかし、そのことに悩まずに済んだのは、鈍感だから、無知だからではなく、何よりも「殺したのに、また次の年に会える」からです。ここにしか「死」を克服する道は見つからないのではないのでしょうか。

この感覚は、草木には「生」と「いのち」と「たましい(霊性)」があるという実感につながりました。その結果、面白いことが起きました。日本に渡来した当初の仏教では、草木を生きもの(有情)と認めない教義でした。ところが平安時代になると「山川草木悉皆成仏」という天台本覚思想が生まれ、草木なども有情化し、仏性を獲得し成仏できることになりました。

近年ではこの草木も生きものであり、仏になる仏性があると教える、本来の仏教ではなく日本人が勝手にでっち上げたものだという説が有力ですが、そんなことはどうでもよいことです。

Ⅳの「本覚思想」によって、日本人はあらためて、山川草木の命が、自分たち人間の命と同じだという感覚を強く持つことができるようになったのではないのでしょうか。なぜなら虫や草、人間同様に、仏性があり、成仏できるのだから、天地の生きもの同士という天地有情の実感を抱きしめることができるからです。

(宇根豊『日本人にとって自然とはなにか』より。

なお、本文には省略等があります。)

\*1 アニミズム……自然界のあらゆるものに、靈魂があると信じること。

\*2 口蹄疫……家畜伝染病の一つで、ウイルスによる感染症のこと。

\*3 「山川草木悉皆成仏」という天台本覚思想……生きるものすべてが仏になる性質を持っているという仏教の思想。

問一 A・B・C・Dにあてはまる言葉として適当なものを、次の

のア～オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア じつは イ そこで ウ ところが

エ たとえば オ むしろ

問二 A・Bにあてはまる語の組み合わせとして適当なものを、次の

ア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア Aまで Bさえ イ Aさえ Bまで

ウ Aすら Bでも エ Aしか Bとも

オ Aでも Bなら

問三 ——線①「こういう気持ち」とは、どのような気持ちのことですか。適

当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私たちに役に立つものをすぐにでも見極めたいという気持ち。

イ 私たちに想像させる力を持つものを所有したいという気持ち。

ウ 私たちの身近にあるものをいつも眺めていたいという気持ち。

エ 私たちの目前にあるものとしつくり会話したいという気持ち。

問四 —— 線②「生きものが語る『物語』とは、どのようなことですか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生きものが農業技術の進歩で大量の食べものに変わり始めたため、育った自然環境ではなく、価格や品質のよさが重要視されるのはよくないと訴えかけていること。

イ 生きものが自然の中でどのようなめぐみを受けて育ち、自身も自然のめぐみとしてどのように食べものによってきたのかを、無言のうちに伝えようとしていること。

ウ 生きものが成長していくために、どのようなめぐみで育てられたのかを示し、自然を保護することの大切さを目に見えるかたちで伝えようとしていること。

エ 生きものが人間たちの身近で育ったあと、まったく別の形の食べものに生まれ変わるため、農業技術の進歩の素晴らしさを自信をもって伝えようとしていること。

問五 —— 線③「こうした能力」とは、どのような能力のことですか。本文中から十字以内で抜き出さなさい。

問六 —— 線④「こうした徹底した鈍感さが、近代化技術の特徴なのです」

とありますが、筆者が言う「近代化技術の鈍感さ」とは、どのようなことに表れていますか。解答欄に合うように、本文中から十一字で抜き出さなさい。

【十一字】がないこと。

問七 —— 線⑤「農業では、生のくり返しこそが、もっとも大切にされました」とありますが、百姓たちが「生のくり返しこそが、もっとも大切」と感じていたのは、なぜですか。次の文の空欄に合うように、本文中の言葉を使って、二十五字以内で答えなさい。

百姓たちが、【二十五字以内】と感じていたから。

問八 次のア～エは、本文を読んだ後に生徒たちが語った感想です。本文の内容を正しくとらえているものとして適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現代では工業製品の性能や価格やデザインの良さが目立ち、誰もがブランドにあこがれを持っているから、おいしい食べものも同じようにブランド化しているのさ。

イ 「本覚思想」のおかげで、日本人は天地自然のすべてが自分たちと同じような命を持つ仲間なのだ実感して、生きもの同士で通い合うものを感じているんだね。

ウ もともと仏教では草木に命はないと考えていたので、農業で草とりを

しても草を殺しているという感覚が生まれなかったから、多くの農作物を育てられたってわけ。

エ 日本のアニメイズムでは虫や草だけでなく、太陽や雨にも心や意図を勝手に読み取っていたから、食卓の「物語」も人間の思い込みからできて  
いるんだね。